エリンという世界

雪離羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
エリンという世界

【Ｎコード】
Ｎ０６５２Ｈ

【作者名】
雪離羽

【あらすじ】
エリンという不思議な世界へ来た私たち「ミレシアン」のエリンという世界をすごす物語。

エリンでの時間

私たちは現実(ちがう)世界から来たミレシアン。だが、見知らぬうちにこの世界(リン)に入ってしまった。
そして私もその一人。
このエリンですごしている時間は私にとってすごくうれしくて楽しい世界。もちろん他のミレシアンも楽しくてうれしい時間…の、はず。（つまらにのにやる人は多分いないとおもうヨ。）

まぁ。ここから←は私のマビライフを語りますのですヨ！

私の「巣」となる場は、「ティルコネイル」ティルコネイルは現実世界から来た人々が謝意所に出会う村。ゆたかでほのぼのとしている…。そんなところが私はすき。
ティルコネイルの中でも雑貨店がある、私の巣はその中の左側の方に毎日チョコンッっと座っている
たまに求めている服があったりもある。その店長？らしき人は真ん中にいる「マルコム」というちょっとだけイケメンの男だ。
彼は体が弱い、だけども旅館前にいるじゃじゃ馬らしぃ美少女…？がいる。そのじゃじゃ馬の名は「ノラ」どうやらノラのことが好きらしぃ…（本当かどうかはマビをヤッテクダサイヨ！）
まぁそれはいいんだけども…（ぇ
私はいつものようにマルコムに話しかける。
「マルコムさん、マルコムさんお店をちょっと拝見させていただきますよ（違」

「ぁ、いらっしゃいませ！」
細々とした声が店中に響き渡る。
「今日はどんな色かなぁー」
と、見ていると私の大好きな色、「紫」があった、私は興奮して思わず１万５０００を手ににぎりしめて、洋服を買った。
そして静まると再び私は左側にチョコンッっとすわるのだった。
暇だなぁ～～～～…。そう思いながら座っていた。
すると、

ピコ～ンッ！
と音が鳴った。これは相手からメッセージがきたのです。
だれかって？そりゃキマッテマスヨ。
私の夫、「八意雷光」
私の夫はどっちかというと、私より先にこの世界に来ているのになぜか累積は私のほうが高かったのですよ（そりゃ、転生してるものね）
でもいつもダンジョンとかもぐっていても
妻を守る・・・・。
という行動はない。そこがかなしぃ。
だから信用していないのです（ぁ
でも、やさしいのでまぁそこは…ね？

そしたらメッセに「氷空羽（ソラハ）」という名前もでてきた。
ソラハ、私の姉であり、信頼できる姉だ。いつもは聖堂アルバイトとばかりしているので「勤勉」とっているし、祝福ポーションも１１５コぐらいあるっていうし…
さっすが私の空だわーっと（開き直り）
メッセの会話は長くなった…

空「ねぇねぇどこかいこーよー（ぉ」
雷光「どこかってダンジョン？それとも遺跡？」
雪「ぇー。ダンジョンも遺跡もいやぁーだぁーーー！」
空「ゆきはあいかわらずわがままだねぇー。」
雪「うるさいっ！」
空「ま、どうせ雪は私に勝てないんだものーっ」
雪「いつかかならず追い越してやるぅーー！」
雷光「その勝負をぜひとも見たいですね。」
雪・空「雷光、シメよっか？」
雷光「ひぃぃー！サーーーセン！」

と、まぁ長い会話でしたのであとは省略シマシタ。
結局ダンジョンにいくことになった。行くダンジョンは「ルンダダンジョン」といって骨ばかりで最初にこのダンジョンに言った人は吐き気がするくらいリアルできもぃという（ぁ
まぁ私たちは慣れているので骨なんてどうでも（以下略
ルンダダンジョンのロビーの片隅に空の大親友の「八意永林」、その隣に「瑠恵美咲」私呼びは、「えーりん」と、「美咲ちゃん」、
（呼び方は空と同じ）
美咲ちゃんの後ろにがっちがちのよろいを着けて茶毛をした美咲ちゃんの結ばれた人。
「灰宵」
私呼びでは、「灰さん」と呼んでいる。
灰さんはいつも私の愚痴を聞いてくれるお兄さん（ぇ
ツ、ツンデレでわるかったねっ！！！！！
ハイさんはいつでもどこでも美咲ちゃんがピンチでいると「美咲ち

ゃんどこだっ！レーダー」でも、もっているかのように駆けつけてくる。
とてもよい夫婦だ。

えーりん「ぉー。空ちゃんと雪ちゃんじゃないかー、あれ、おまけにらいこーまでいるのか。」
雪・空「やふー」
雷光「ひどっ！」

美咲ちゃん「ぉー、空ちゃんと雪ちゃんんだぁーやふもーー。」
美咲ちゃん「あれ、なんかおまけがついてるねー。」
雪「ウン、ソウダネーどんまぃらいこー」
空「乙様～☆」
灰さん「空さんやふーついでに雪さんもやふーあと、雷光ドンマイ・w・」
空「そういえば、美咲ちゃんたちどしたー？」
美咲ちゃん「いまさっきルンダ上3人いったところー」
雪「ぃーなぁ～～～～！」
美咲ちゃん「もう危なかったんだよ～。だけど灰宵がいたから結構楽だったヨ（、・ω・）」」
灰さん「美咲ちーはどんなことをしても俺が必ず守（以下略
雪「やっぱりいいよね、この夫婦ー・」
空「ねぇーw」
雷光「俺たちは？」
雪「ぇ？離婚したいというならいますぐ（以下略」
雷光「そ、そうじゃないよーー！」

灰さん「雷光乙ー」
美咲ちゃん「らいこー乙ー☆」
えーりん「らいこー乙様ー☆☆」

雪「らいこー乙っかれ様ー☆」

空「らいこー乙様ーー☆」

まぁ、そんな会話をずっとしていたら会話にのってしまいルンダは行かなかったとさ…（え

エリンでの時間（後書き）

いや、普通でしたよねぇ…（汗

いや、最低だったかも…（ぁ

だめだったらだめといってくださ（以下略

影世界。

んぐは…。
「暇だから影世界でも行こうかなー。」
影世界は報酬が決められているが結構報酬はおいしいのだ…。
まぁ、ハードのほうがいいのですが。
テコテコとタルティーン（重い町）に向かうことに。

「はぁ～…、重い重い」
グダグダこねながらも、パティーをつくり、ミッションをとろうと
掲示板の前までいって、
「シャドーウォーリア」というクエストをとってから、
重い重いといいながら鳥に乗り、祭壇までかけ飛びました…。
「よっし、祭壇に到着…。きっと軽い人は３０秒でつくんだろうな
…。」
さて、影世界に突入。

そして、スイッチＯＮ。

…
あれ？敵がでないよ？
「なめてんのか、スイッチ！！！！！」
ドッカンドカドカドカッドッカーンー！

はぁはぁ。いくらやってもでない。

ウン、これは鯖落ち（簡単に言えば故障…（ぁ）
と、しばらくまっていること１０分。

「やっとでたぁー！さぁ狩ろうじゃないかっ！」

…

「あれ？クエとは違うモンスター…」

私の目の前に現れたのは、シャドーウォーリア…でわなく、得体の知れないものでした。

みょうにジットとまっているので、１発スマッシュをお見舞いしました…が、

敵は止まっているのに、シールドもはってないのに、跳ね飛ばされてしまったのですよ。

ぇ？なにごと？おかしぃよね？

その敵は、血の気がさめるような、赤黒い目をしていて、まるでオーガのように太っている。いや、オーガの体にそっくりだ。

私は恐る恐る上を見上げ名前をみてみた。

「…ちょっと、名前ないとかドンダケですか！？それとも私の頭がおかしくなったからこんなのがでちゃうんですか！？」

もう、下を向いてばかりいると、その得体の知れない敵は、ギラリと赤黒い目を光らせ、こっちをにらみつけてきた。

そして、１歩１歩、こちらに向かってくる。

「いや、こ、こないで…神様ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーー！」

このの世界には神様などはいない。

そんなことはわかっていてもなぜか叫んでしまう私。

死んでも痛くない。なぜならこの世界には「死」というものはないのだから。あるといえ、１時的に死ぬだけだ。

だけど、私はナオを持っていない。
そんな愚痴を言っている間に、得体の知れない敵は目の前まで来ていた。

「……神様、私はもう精神ありませんね。はい。ということでこちらも重いんで死にますよ。さようなら、さようなら。」

そしてそいつは私を投げた。
私は飛んだ。
そして死んだ。

完。

もう家（ティルコ）に帰ろうと、ボロボロのまま帰った。
もうヒーラーの家に突入した。

「雪離羽さん、その怪我どうしたんですか！？ぁ、でも治療には９０Ｇかかりますよ。」
「ちっ、ちゃっかりした金取り女め・・・。」
「ん？なんかいいました？」
「いっ、いいえ！」
私は手から９０Ｇを取り出しディリスさんに手渡した。
「ねぇねぇディリスさん。私影世界で、「シャドーウォーリア」っていうクエやってたんですけど、１個めのスイッチを何回たたいても敵がででこなくて、で１０分ほどまったらやっと出たと思ったんです。が、なぜか敵がちがくて、オーガのようにそっくりで、血の気がさめそうな、赤黒い目をしていて、すんごく強かったんですが、

あれはなんだか知ってます？」
「さぁ、なんのことかしらねぇ…。知ってたらとっくにはなしていたんだけど…。」
「ならいいやぁ…。アリガトゥゴザイマァス」

だれかしっているかな～っと、ダンカン、マルコム、ベビン、ケイティン、ノラ（みんなＮＰＣです…。あんまり知らない人はマビノギをやって調べてください。）
に、聞いてみたけども、誰も知らなかった。
「いやぁ、さすがにアリサは知らないよね～っ。」

「ぉ？なになにぃー？」
とすぐ近くにアリサが不思議そうな顔をしてこちらを見ていた。
「ん、知らないと思うけどね、今日かげ世界にいったら、（以下略それってなんでかしってる～？って思ってさーｗ」
「ぁー…、それ知ってるよ～ｗまぁ知りたくなければいいけどねーーｗ」
「ぁーー！！！知りたいです、知りたいです！」
「んじゃ。教えてあげる～。あのねーｗ」
と、アリサはベラベラと会話をした。

影世界。（後書き）

本当に下手でゴメンナサイ

アリサのクエスト

あのねぇーw「影世界」ができるまえ、オーガの群れが、『ティルコネイル』『ダンバートン』に襲いにいっては、ところどころを壊していたんだってーwで、影世界ができたときと同時に、「タルティーン」という、新しい町ができた。オーガの群れは、ダンバとかティルコとかと同じように、タルティーンにも襲った。だが、『ケイ』という錬金術師という、錬金術をよくやりこなす人間がいた。オーガの群れは、ケイの手によって、倒された。そして影世界に封印されたといわれているわwそしてオーガは目を覚ましたときには影世界に入っていて、もう現実世界には出れなかった。それを期に、オーガは影世界を歩き続けた。他の敵、シャドーウォーリアにも、他の敵にも負けなかった。やがてオーガは影世界の強い敵…となり、体も心もすべてが影になっていた。影になったオーガはいまだにあるきつづけている。そうして時々ニンゲンの前に姿を現す。って聞いてたよー」

私はそのことを聴いた瞬間、冷や汗がタラタラと流れ出した。

そしてアリサはこういった。

「オーガにあってしまって、生き残れたということは奇跡だったのねー。確かあってしまった人が帰ってきたという話はないわ」

もう聞きたくないと私は走り出した。

怖くて怖くてもう逃げ出した。

すると、旅館後ろに、ユニコーンテールのお姉さん、「真空の旅人」と、今にも襲い掛かってきそうなお姉さんの「内田ユカ」さんたちとその横にえーりん、その横の横に美咲ちゃん、その後ろに、灰さん、その斜め右に空、おまけつきでらいこーがいた。

真空の旅人は私呼びで「みぃちゃん」内田ユカさんの場合は「ユカさん」と呼んでいる。

らいこーと私以外はみんな強くてやさしぃ人たちだ。

みぃちゃん「ぉー、ユッキーじゃないーwどうしたー？目に涙があるけどーw」
灰さん「雪さnどうしたーwらいこーにでもいじめられたー？」
らいこー「ち、ちがうよ！！！っ！」
美咲ちゃん「ノノーw雪ちゃんどうしたのー！？」
空「ぁーどうせなんかでボロ負けしたんでしょーw」
ユカさん「らいこーにいじめられたんだね、かわいそうに…。」
らいこー「だからーーちがうって！！！」
雪「いや、影世界のことで…。怖くてさ…」
ユカさん「雪さん、G9でとまっててて怖いのー？」
雪「いや、ちょっとアリサから聞いちゃって…。」
みぃちゃん「ま、まさか！？」
美咲ちゃん「ま、まさか！？」
空「ま、まさかなんてことはないよ！？」
灰さん「ま、まさか！！！？？？」
らいこー「まさかねーw」
えーりん「ま、まさかってなにさー！」
雪「まさかってなんのまさかさーーww」

みぃちゃん「いやらいこーにすんごくいじめられたんだなーって（ぁ」
灰さん「確かにー」
美咲ちゃん「かわいそーw雪ちゃん」

空「らいこーひっどーぃーーw」
ユカさん「らいこー最低だー！」
と、みんなわーわーとうるさかったので私は思い切ってこういった。

「だーーーーまーーーーーーーれーーーーーーー！！！！！！！！！！！！！！！！」

・・・シーン
いっせいに静まった。
「ヨシ。」
「あのねーw今日暇だから、影いったのーでシャドーウォーリアやってて、最初のスイッチたたいてもでないから鯖落ちだなっておもってまってたらでたんだけど、それがオーガみたいな体つきで赤黒くて血の気がさめる目をしていてそのことだれかしってるかなっていろいろきいてみたら、以外にアリサがしってて、で、こういったの『影世界ができるまえ（以下略

誰もいないかのようにずっと静まっていた。
そういうとらいこーが
「そんなのうそうそーw影いってみればわかるでしょーw」
みぃちゃん「いや、うそじゃないかもしれない、本で読んだことがある。」
ユカさん「ぇ。本当だったら行くの？」
灰さん「行ってもいいけど俺が守るのは美咲ちーだ（ｒｙ」
えーりん「ぇ、こわいからゆかにしがみついておこう。」
空「こわぅーぃ。雪にしがみついていこう。」
雪「ぇ。本気で行く気？」

まぁ、最強3人組がいるから大丈夫だと思い、私も確かめについていくことにした。

消えた人。

みぃちゃん「さぁ出発だぁー！」
みんな「ぉーーーw」
そういってまたもや重い町にでかけにいった。
みぃちゃんがクエストをとってきた。
選んだのは初級。
みぃちゃん「さぁ、だだっとおわらせよぉーっ！」
みんな「わーぃ！」

影世界に進入中・・・。

やはり、入るだけで重い。
さぁ一つ目のスイッチ。
みんなの顔は緊張感が走っていた。
ユカさん「さぁ、たたくよ。」

みんなは真剣な顔。
と、たたくと普通に敵が現れた。

らいこー「なーんだ、でないじゃん。雪嘘ついた。」
雪「ひっどーぃ！雪はこの目で見たのにぃっ！」

・・・
まぁみぃちゃんと、強い組がいたので１０秒で完。

美咲ちゃん、えーりん「出なかったから安心したーw次いこーっ！」
灰さん「そうだねぇーw」
私は頭がこんがらがりながらも見学していた。

そして終了。
報酬をもらおうと、みんなが宝箱にたかる。
空「雪うっそついたぁーw」

ユカさん「イヤイヤー。そんなことはないんじゃない？たまたまでなかったってだけかもよー。ねぇーいとしのえーりんw」
えーりん「ちょwまぁ、そうだねーw」
みぃちゃん「確かに。人数がいっぱいいるから、多分でてこられなかったんだろうねぇーw」
雪「そ、そうだよねっ！」
すると、地震のようなゆれが起こった。
いや、むしろ地震かもしれない。

まるで大地震のような揺れだ。
みぃちゃんの顔は冷や汗をかいていた。
雪「みぃちゃんどうしたのぉー？w」
みぃちゃん「あ、あれみて・・・。」

目の前にはこの前見たやつだ。
ぇ・・・・・・？

神様、これは幻覚じゃないのでしょうか？このまえみたやつより10倍巨大になってるのは気のせいでしょうか？

そして私をにらみつけた。

私の顔には冷や汗がタラリタラリと落ちてきた。
みぃちゃんと灰さんとユカさんがＦＨ(ファイナルヒット)をいくらやっていても、０ダメージだ。
「嘘っ。でしょ・・・。」
みんなの口からはそれしかでない。
オーガのようなやつは１歩踏み出した。
また１歩また１歩。

雪「らいこーあぶないっ！」

らいこー「あ、足がう、うごかな・・・い・・・」

そしてオーガはらいこーをギュウっと握り締めた。
そしてそのままらいこーをつかんだまま消えていった。

みぃちゃん「ら、らいこー・・・」
灰さん「う、嘘だろ・・・。」
美咲ちゃん「らいこー？もどってきなよ。らいこー」
空「らいこー、どこいったのー？隠れても無駄・・・だよ・・・」
えーりん「はやく出ておいで。ハードに連れて行ってあげる・・・から」
雪「ら、らいこー嘘でしょ・・・もどってきてよぉーーーっ！もっとやさしい妻になるからーっ！」

消えた人。（後書き）

まるで単小説ですね。。。

灰さんの死。

ボーーーーッ・・・・。

いつもの会話はすごくさびしかった。

雪「１人でもいないとこんなに寂しくなるんだね・・・・。」

美咲ちゃん「どうにか助けられたらいいのに・・・。」

えーりん「無理だよきッと。」

ユカさん「もう一度行こうとしても多分でてこないんだろうな・・・・」

みぃちゃん「ウン・・・多分でてくる確立は１０００パーセントの中の１パーセントダヨ・・ウン」

空「らいこーなんてどうでもいいや。」

灰さん「らいこーがいなくとも俺は美咲ちーがいれば（ｒｙ」

どかっ！

みんないっせいに灰さんを殴った。（両手剣で）

・・・

会話が長いのでまたまた省略。

みぃちゃん「１０００パーセントのうちの１パーセントの奇跡をねがって、いってみようか・・・・。」

そして
私にとってはすご～～～～～っく重い町（タルティーン）にまたまたまたまたいくことに・・・。

みんなは馬をだしてすらすらと走る・・・が、私だけはドカッ！ドカドッカ！とか・・・。

よぉしついた。
みぃちゃんがクエストをとってくると、

いっせいにかげ世界へ突入。
1つ目のスイッチ・・・。

でてくれるのか。
らいこーを助けられるのか・・・。
みんなの不安は溜まるばかりの中、
1つ目のスイッチをたたく・・・・

と、思ったら遠くから、

ドカッ！ドスン！ドスン！
と、足音が聞こえる。
みんな「あれはもしやっ！」

みんなは急いで駆ける。

やっぱりいた。
目の前にはこの前見たオーガ。

みぃちゃん「中心部にいるのは誰だろう。
オレンジ色のネコのローブをかぶり、目をつぶっている少年・・・。
雪「あ、あれは・・・。」

「らいこーーーーーっ！」
「らいこーいま助けてあげるからねッ！」
と美咲ちゃんは叫ぶとオーガの近くに走っていった。
するとオーガの目が美咲ちゃんをギラリとにらみつけた。

オーガが右手を上に大きく上げた・・・。
「美咲ちーあぶないっ！」
灰さんが美咲ちゃんをどーんとおすと、灰さんがオーガの右手の下にいた。
オーガはそのまま右手を振り下ろし、灰さんに直撃した。

オーガが右手を上げていたころには、灰さんは意識がもうろうとしていて、ふらふらした後、
バタンッ！と倒れた。

「灰宵！！！！死んじゃいやーーーっ！ねぇ、おきてよーーーっ！」

そういっても、灰さんは目を開けず、つぶったままだった。

「ぇ・・。灰さんまで失うなんて、そんなのひどすぎるよっ！」
周りの空気は、一瞬だれかがわめきならが叫んだいた・・・。

灰さんの死。（後書き）

単小説だぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！

絶望

らいこーも、灰さんも・・・みんないない・・・・

美咲ちゃんはずーっと灰さんの体から離れてはくれなかった。
いつのまにか灰さんの服は美咲ちゃんの流した涙でいっぱいになっていた。

「らいこーは、なんでオーガの体の中にはいっていたんだろう・・。」

「らいこーって叫んでもぜんぜん反応なかったし。」

「グスンッ・・・（´；ω；）多分オーガの体の一部みたいになってるんじゃないの・・・グスンッ。」

美咲ちゃんは泣き声になりながらも答えた。

私はみんなの話が耳を通ってすり抜けるかのように聞こえた。
なにもかも失った。

私は遠い遠い空をずーっとみていた。

「雪・・・。大丈夫？雪・・・？」

私にはそんなこえも「ゆ・・・じょう・・・？」ときこえるようだった。

涙が止まらない。

夫も助けられず、美咲ちゃんを悲しませて、灰さんの死を待つしかないなんて・・・。
でも・・・私がみんなを連れて行くなんていわなければ、こんなことにはならずにすんだんだろうな・・・。

「みんな・・・・。」
そういうとみんないっせいに私をほうを向いた。

「あの・・・。ごめんね・・・まきぞわせちゃって、美咲ちゃんを悲しませることになって・・・みぃちゃんもかなしませることになって・・・美咲ちゃんは2回も悲しむことになって・・・本当にごめんね。」

「いや、そんなことはないよっ！」
「ただ、らいこーがどじだったからこうなったんだよっ！グスン」

みんながちょっとだけ盛り上がってきたとき、私はこっそり抜け出して影にいった。

「もうこれ以上、みんなをまきぞいにしたくない・・・。せめて私は死んでおこう・・・。」

そう思いながらオーガに合えることを信じて影に進んだ。

もう重いなんて関係ないんだ。
いまは「助ける」が優先になっている。
オーガ。でてきて・・・お願いだから・・・。

・・・。
ドスンッドスンッ！
でてきた・・・。
「ぁ、らいこーいたー！いま助けなきゃっ！」

運がよかったことにオーガはまだ私に気づいてはいなかった。
らいこーのいるところは人間でいうと心臓のあたり・・・
まるでオーガの心臓のように丸いボールの中にうずくまっている。
「あれさえ、壊せれば・・・・。」

「まてよ？らいこーが心臓の一部だとしたら、あのボールさえこわしてらいこーを出せば
オーガは死ぬはずだよね？」

ニヤ・・・・。
私はペットからDB（ドラゴンブレイド）を取り出した。

じゃあ、いくか・・・。
すると・・・オーガの目に私が写った。

オーガはこっちにむかって走ってくる。

私は少し引いたが、「負けるものかっ！」という勢いでどんどん前にすすんだ。

絶望（後書き）

・・・・。へたでスミマセン・・・（´；ω；）

らいこー救出編

今・・・今助けてあげるからねっ！そのままでいてよ！？
オーガは、たちまち私に恨みを持つかのように、近づいてきた。
すると…オーガは灰さんと同じように右手を上げた。

「…。ストンプだ。」
私も潰されるのか・・・。
いやぁ…そんなのやだし…せめて助けられてから死んでおきたいものだぁぁぁぁぁぁぁ。
オーガは右手を…。
ドスンッ！と振り下ろした。
さぁどうなる。

私は見事にその下にはいなかった。
つまり、ほうきにのって空に飛んだのだ。

「ふぅ…。あと1秒遅かったら潰されていたんだ、こうやってかわせていられるのも精々2回ぐらいしかないかな・・・。」

オーガは安心したのか、どこか遠くに足を運ぼうとしていた。

だめだっ。おいかけなきゃ！
私は低空飛行でオーガの後をおった。

オーガについていったものの、着いた場所はまるで蜂の巣…かのような場所だった。

「なに…これ…」

私が目の前に見たのはオーガがまるで自分の体をちぎってとってい
るかのように腕や足・・
首などをとっていった。

オーガの腕のなかから、なにかむにゅー・・・っとでてくる…。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・。

ちょ・・・オマ…。

人がでてきたのだ。

そしてオーガは頭をとると、小さいいすに座った。
オーガは体の中心部をとると、まるで人間かのような体で小さかっ
た。

…。ぇ？

私は、「これは夢？あんなにつよかったオーガがこ…こんな小さな
人だったなんて！？」

私はほうきをしまうと、裏口からそーっと入っていった。

見るからにオーガだった人は寝ている。

「ぁーウン・・・あれだよ、きっとあの人はハウルの動く城みたいにさ…ハウルが化け物から力尽きて、人間になる…系な…。」

なわけないか…。

脱ぎ捨てていたオーガの体の一部はずーっとおいてあるままだった。そしてらいこーが入っている心臓あたりの一部もそこに脱ぎ捨ててあった。

「…。そぉーっと盗むか・・・。」

よいしょ…。

抜け足差し足忍び足…。はい・・もう一回。

抜け足差し足忍び足。

っと…。

どうにか気づかれずに到着したようだ。

らいこーが眠っているからだの一部はまるで本当のオーガの体のよ

うだ。

だけどところどころくさいしカビも生えていた。。

…。おぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ。

腕の部分にも見知らない人が入っていた。

…一様つれてかえるか。

よいっしょ。

…さてもう一度。

抜き足差し足忍び足。もう一回。

抜き足差し足さぁ帰ろうしのび足。

どうにか外に出たようだ。

私はオーガの体かららいこーと人を取り出してペリカンをだした。

ペリカンの大きな口の袋に人を詰め込んで…さて・・ペリカンちゃん。

がんばって美咲ちゃんのいるところまで飛んでくれたまえ。

ぺりかんを2、3発たたくとペリカンは大空にとんだ。

らいこーの意識はなさそうだ。

でもまだ息はしているみたい…いまのうちに早く助けないとっ！。

「みーさーきーちゃーんっ！」

「ぇ？」

「ちょっ！雪っ！！！！！どこにいってたのっ！さがしまわりまくったんだよっ！！！」

「それよりも美咲ちゃん。ほら・・・ペリカンの口みて。」

「ぅ…っ！！！らいこーっ！！！」

すると、その大声で気づいたえーりんは

「らいこーっ！！！！！よくぞ無事でっ！ってらいこー？意識大丈夫ー？」

「ねぇ雪。」

「んぃー？」

「どうして雪はらいこーの居場所がわかったの？」

「えっと…それは…。」

「まさかあんた…。オーガのところにいっていたの！？」

「ウ…ウン…」

「でも…らいこーやほかの人もつれてきたんだから」

まだ話し途中に空は私の顔をみて・・・

ペシンッ！！！！！

私はなんで！？どうして！？という気持ちでいた。

「馬鹿雪っ！！！！怪我でもしたらどうするのっ！！！！私がどれだけ心配したと思ってるのっ！！！！もぉーーーー…心配…グスンッ。」

空は泣きながら私の肩にパンチをぶつけてきた。

でもいつもやるパンチとはちがかった。

『ごめんね空…ごめんなさい。』

気持ちの中でそう思い続けた。

らいこー救出編（後書き）

次回はちょっと怖いみたいに・・・。

のぼぼーん。

っと。
らいこーも救出したあと…空に氷漬けにされてと…

いやぁまぁ…いたかったですとも。いたかった。
っということで。また平凡な日がやってきたのですよ。
はい。平凡になったのでこれでおしまいね。

…

ってわけにはいかないので。
なにかお話を作ることにした雪。
なにを作ろうか迷っているとき…
ピンポーンっ！
ひらめいた。
ぁぁまさにあれですね。「ピラ〇キー〇！」←爆死

こういうことですね…。

こういうことにしよう。

よし、
空が死んだ。
っていうお話！（何
すると聖堂アルバイトで退屈そうに待っていた空が盗み聞きをしていた。

＞ｉ２０３０―２１９＜
ちっ。
「なにさっ！なんで私が死ななきゃいけないお話なのさっ！」

「ぁぁ。最近平凡すぎてつまらないから。すこし刺激のあるお話がいいなーっって。」
「雪。こんどはＩＳフルチャージくらいます？ｗ」
「…御遠慮しておきます。空様…。」

「それとさ雪。その空様ってのどうにかならない？」
「だってこういうときの話は様づけするのが一番なんだよ？」

「知らないわー。そんなうそっぱち。」
「うそっぱちじゃないわいっ！！！」

「あっそ。」
「うん、そう。」

「じゃぁうそっぱちだから、信じなくていいよ。でも。このお話は続行するんだからね。っていうか。

まだ始まってない話だし。」

「んじゃぁ、私もお話つくっちゃおー…w」

「どんな、お話ー？」

「んー。雪には教えないよ。

簡単に姉を殺してしまう妹に教えると、本当に殺されそうだからね。

ウン。」

「…じゃぁもっと悲惨な状況にお話を追い込んでやる！」

「楽しみにしてるよ。まぁ、せいぜい姉を殺しているんだからもっと頑張ってちょー」

「じゃぁさ。空を刺激させられるようなお話を作るから空もどんな話つくるか教えてよ！！」

「んー。雪と同じ雪があの世にいって出られないお話。」

「…」

「おっと、雪の退屈話に付き添っていたらアルバイトの時間になっちゃった。」

「ってことでバイバイ雪。楽しみにしてるよ、その『刺激』とやら。」

「絶対に、頑張るもんっ！」

…ちっ。負けたらどう取り返しをつけようか…。

ちっ。ちっ。ちっ。ちっ。ｘ１０００００００（ｒｙ

ＯＲＺ

のぼぼーん。（後書き）

のほほーん。な出来事でしたー。（（，艸（＊，艸、＊）艸、））
ウシシシ・・・
今回は姉の挿絵を頂き少しおもしろくなったと…（ｒｙ
でわでわ。これで失礼いたします。（（，艸（＊，艸、＊）艸、））
ウシシシ・・・

のぼぼーん。ぱーとつー

のほほーん。
んーむぅ…

今度のお話は本当に空を殺すお話をつくるしかないか…。

まぁ、私だからできることb↑オイ
ってことで、沈みかけたパララに私はお祈りするように手を合わせ、
私はこういった。

「あぁ、空よ。さようなら・・・・」
一瞬私の心の中はこんな気分に陥った。

……（（、艸（＊、艸、＊）艸、））ウシシシ・・・

そう、つまりこんな気分。

はぁ、ごめんよ空。
君のことは一生痛々しく忘れることはないよ…多分ねb

するとさ…なにかほこりをたてて勢いをつけてこっちに全速力で掛けてくる少女をみつけた。
＞i２０５４―３１９＜
「ちょっとまてぃっ！！！！勝手に人を殺すなぁぁぁぁぁっ！！！！」
「あぁ、ぇぇ。だってほら、ちゃんとパララに『さようなら、空。』

って願ったじゃない。ウン。」
「そういうことじゃないわぁぁぁぁぁっ！！！さても姉だぞぉぉぉぉ！」
「ぁぁそうっか。ってあれ。空生きてたの？」
「だから、ってなんでもう死んでるんだぁぁぁぁ！！！」
「ぁぁそうk。いま目の前に居る空は亡霊か。ウン確かにそうだね。そんな気もしてきたよ。」
「ぁぁそうか。私も早く雪が死んでいくところを考えないと。この雪の『たすけてぇぇ！』っていう生き様をみたいなぁ。」
「勝手に殺すなぁぁぁぁ！」
「ぁ。ごめんごめん。」
空の心の中を再現してみよう。
・・・・・・（（、艸（＊、艸、＊）艸、））ウシシシ・・・（（、艸（＊、艸、＊）艸、））ウシシシ・・・
って感じらしい。
「ちょっとぉ…罪悪感でいっぱいな姉なんてもったことないよ。」
「なにが罪悪感じゃぁぁ！そっちだって私をころしているではないかぁ！」
「雪は単に『お話』だし。殺してないし。そっちは現実にしようとしているじゃない。」
「確かにそうだね。ちょっと罪悪にならないように『お話』の世界

だけで
終了させておくとしよう。」

っと。私と雪は楽しいお話をつくることに専念し。
空はバイトを休みがち。
雪はいまだにまだまだ熱心に（ｒｙ

「どこが熱心にじゃぁぁぁ！！！！ぜんぜんっていうか、１文字も書いてないじゃないっ！！！」

「ぉぉ。みしてー。」

「なんていう天然…。」
「ぉぉなるほどぉー。」

「そんなにおどろかなくても…。」
「これ家に持っていっていいー？ｗ」
「いいけど、明日のイウェカが昇る前に返してよ？」
「なんでイウェカが昇るころなわけ？」
「ん。なんとなくｂ」

「『ｂ』ってなんだ。」
「まぁいいや。これは約束ってことでね。じゃノシ。」
「（ゝ・ω・ノン）」

「さてと…さっさと家にかえりましょう…。」
サラブレットをだして。

パカラッパカラッパカラッ…（ｒｙ

家っていってもダンバだけどね。
さて。
空から借りたお話をじっくり読むとしよう。それをちょっと言葉をかえて写してしまおう。

いやぁ。いいねこの考え。なんていうか。『写す』なんてきれいじゃない？この響き。
空のお話はこうかいてあった。

雪の苦しむ生き様を…。

あるとき私の妹がこういった。（なんていうか、すんごくシンプルな最初…（雪））

空ってある意味ちょううざいんですけどー。
マビさっさとやめてしまえってのー。（ていうか、私がこんなことを発言！？ありえないんですけどー。）

私はまたまた盗み聞きをしていた。（うわっ、悪人。）

・・・・・なるほど。私をマビからはずそうとしているんだな。

あの雪め。

でもまぁ。私の妹ですから。少しは許しちゃうけど。

だってぇ。かーわいーんだもーんっ！（なんだこの人。）

でもちょっとだけいぢわるしてみよう…

かわいい苦しむ生き様をちょっとだけ…ね？

っていってもあまりにもひどいことはしないさ・・・そんな姉じゃないからね。

よし。こうしよう。

と私は作戦開始となった。（作戦会議とかないわけ？）

まずは最初に

雪の大切にしているものを2つとってみることにした。

えっとぉ…

エレゴシと、大きなリボンかなぁ。

まぁいっか。

さぁ私は草陰に隠れてっと。

ぁー雪がきたー。

雪はこういうことをいっていた。

あるぇ…
エレゴシと大きなリボンがないっ！！

どーしよーっ！！
ダンカンさん！私の大きなリボンとエレゴシしりません！？
「知らないなぁ。みてたなら即雪離羽にいっているんだが。」
…

うぇぇぇぇぇぇぇぇんっ！
ないないないないないないないないないないないない…

うぇぇぇぇぇん！（再度泣）

私はすこしあせった。
…やばい…ほんとやばい。
雪を泣かせちゃったよ。
明日返してあげよう。

…

END

なんだこりゃ。

最低ー。

のぼぼーん。ぱーとつー（後書き）

っと。
眠いのでこれでひとつを終わらせてしまいましたが。
続きが続いてますので。
ここをひとつわすれないでくださいました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0652h/

エリンという世界

2010年10月14日19時35分発行